

ます。昨年一月には二つの糸瓜が抱きあっているような面白い形のものもありました。そのような光景を「今に実りし」と詠んだことで一句を成功させました。

黄落を青年大樹の下に受く 井深 信男

海鳥に見られ露天湯秋の浜 中嶋 文子

水凌集同人として推薦した直後の訃報でした。大いに活躍と期待したばかりであり、残念でなりません。若者の学習の現場において、青年のころになって黄落を受け止めている自分の姿を喻えて詠まれたのではないのでしょうか。水壺集に投句された五句をそのまま遺句として水凌集に掲載しました。ご冥福をお祈りいたします。

水壺集

子規庵の今に実りし糸瓜かな 角田ひろ子

はきだめ菊はびこるままに秋の雨 佐藤美智子

子規庵の糸瓜は俳句の題材として意識されます。とくに二〇一七年は「正岡子規生誕一五〇年糸瓜忌特別展示」が開催され、新出資料「歳旦帳 明治卅四年一月一日」が初公開されて、多くの方が子規庵を訪れました。研磨を終えて輝きを取り戻した日清戦争従軍携行の仕込杖の刀身も展示されました。子規の目の高さで庭を見ると、たくさんの糸瓜がぶら下がっている

掃溜菊は、キク科コゴメギク属の一年草です。原産地は熱帯アメリカで、日本では五月から一二月に咲くそうです。牧野富太郎博士の命名で、大正時代に東京の世田谷、経堂の掃溜に咲いていたのを見つけて名付けたと言われ、気の毒なような名前ですが、花言葉は「不屈の精神、豊富」だそうです。

海に月のせ伊勢湾の葉月汐 西村みゑ子

伊勢湾の月は海に昇ります。その景色を「海に月のせ」と表現し、地名が効いています。仲秋の名月は八月一日、旧暦の葉月の月です。葉月は月見月とも呼ばれ、見上げるのにちょうど良い高さに満月があり、しかも空気が澄む月見の季節です。

氷室集

海峡の漁火近き夜長かな 宮澤 淑子

御所に居て公家になりきる時代祭 今村 隆史

漁火と言えば鳥賊、鳥賊と言えば函館、海峡と言えば津軽海峡というように連想します。二〇一七年の津軽海峡の漁火とスパーミンの写真が友人から送られてきましたが、津軽海峡の鳥賊釣船の漁火とスパーミンの共演は六八年ぶりでありました。ただし、その便りにあったのは鮫鱈の漁が始まるという話でした。

蚯蚓鳴く月光ソナタのごとく鳴く 福田 将矢

京都御苑にある「拾翠亭」は、江戸時代後期に九條家の茶室として建てられました。その茶室でお手前を披露するような作者ですが、時代祭に参加しても、やはり公家になりきるという体験ができるのでしょう。

晩秋や手なりに添うて志野茶碗 栗本 徳子

ベートーベンのピアノソナタの中でも「月光」は多くの人に親しまれる名曲です。人が食べるための牛、大地に棲む蚯蚓

志野茶碗は手触りも重さも心地よい茶碗と感じさせるすごさがあります。この茶碗で茶を点てることのできる作者です。しかも自分の手なりに添うように自在に扱うことで、この一句が

生まれました。「氷室」の今月号から「京の和菓子」が登場しましたが、作者はこのエッセイのシリーズを企画して指導する方でもあります。

百年の柿に届かぬ竿の丈 渋谷 啓子

庭にある柿の大樹が見えます。木の高さを百年と詠み、柿の木の大きさを見せています。柿農家では柿は三〇年ぐらいで植え替えると言います。しかし、たまに樹齢一〇〇年を超える大樹から、安定した収穫がある話も聞きます。古い樹の柿は奥深い味がするという吉野の農家の方もいます。吉野にも樹齢一〇〇年以上の樹を育てている農家は数軒しかないそうです。

百五十年月は変はらじ二条城 田中 勝

大政奉還一五〇周年記念で、二〇一七年一〇月には各地で幕末維新関連の行事が開かれました。大政奉還の舞台となった京都、龍馬の出身の高知など、貴重な史料を見ることができました。世界遺産二条城でも、さまざまな企画があり、二の丸御殿の殿内で初のライトアップも行われました。二の丸御殿は、まさに大政奉還が行われた場所ですが、私も京舞井上流の舞の舞台で話をする機会を頂きました。狩野派による襖絵「松鷹図」がライトアップで金色に輝きました。二の丸庭園、唐門など、

る音がすべて目に見える波となって押し寄せているのです。秋の景色を水の現象としてとらえて、秋気が際立ちました。

八十路きて何事もなし朝の露 栗本 一代

傘寿を祝う作者のお元氣なご様子、ここまで来て「何事もなし」と言い切ることができるのは羨ましい限りです。

秋の夜や紅茶に落すブランデー 岡田 幸子

ブランデーの香りが漂ってくるような一句です。秋の夜の作者の閑かな佇まいがそのまま自然な一句になっています。

ななかまど今来し道の獣跡 益子 桂子

ななかまどの実が美しい道を歩いて来て、ふと気がつくとい分が歩いてきたのと同じ道を人ではなく獣が歩いた跡があるのです。取り囲む山々の気色までがその表現から見えてきます。

小鳥来る自決の壕の荒らされて 屋嘉比順子

沖繩の歴史を伝える重要な史跡です。そこに小鳥が来るのですが、心ない人間の仕業があったのです。沖繩の人々のこころ

庭園の見所が浮かび上がるようにデザインされた光で、普段とは異なる二条城の姿でしたが、この月は一五〇年、変わらないのだという実感を得たことで句に普遍性を持たせました。二条城は、一六〇三年（慶長八年）に徳川家康が上洛した際の宿泊所として築城されました。家康は二条城造営に、当時最新の技術を導入しました。そして、二条城を建てる時に西洋人が持ち込んだコンパス（方位磁石）を使って測量を行いました。二条城の長い堀は堀川通りに対して東に約三度傾いています。それは北極星がある真北に対して、方位磁石が指す磁北が時代と共に変化し、一六〇〇年ごろには真北から東に三度ずれていたからです。

微笑みて売子手に盛る棗の実 四宮 陽一

売子が棗を買い手の手に盛るといふ景は日本ではなく中国の奥地でしょう。新しく「氷室」の編集委員に加わる作者は京都府と中国陝西省、京都市と西安市の交流を促進する役目を持つ方であり、きっと西安の街中の市場でとらえた一句であろうと推察します。

音すべて波となりけり水の秋 佐久間秋泉

音波も波の一種ですが、そのことではなく、耳に聞こえてい

をこの一句からしっかりと受け止めなければなりません。

もう八時もう九時十時夜なべして 西尾 萌夏

夜なべに至る仕事を日常の時間の経過そのままに詠んで、作者はぐっちょい気持ちは一言も伝えていません。夜更かしして、結局夜明けまで仕事していた数十年前の経験を思い出しました。若いことが羨ましいと感じた一句でもありました。

なみなみと注ぐこちや新走 田村あゆみ

明治になって洋酒が入ってきた清酒は日本酒と呼ばれるようになりました。その酒は、新酒の香りが楽しめるという特徴もあり、酒好きにはたまらない句となりました。

大岩の帰りたからう秋の海 和田美紗子

室戸ジオパークの砂岩泥岩の互層から巨大地震の繰り返し歴史を学びます。その大岩をガイドする作者は、隆起運動で陸に上がってきた大岩を、海に帰りたかろうと思いやっているのです。